

◆特集 病院図書館のニューウェイブ◆

EBMからEBLへ

河合 富士美

I. はじめに

早いもので私が EBM: Evidence Based Medicine に興味を持ち、積極的に関わるようになってもう5年になる。1998年に初めて名郷直樹氏の講演を聞いた時は本当に衝撃だった。医師がこれだけ文献検索に関心を示し、その方法論を研究されているのに驚いた。図書館員の本領は文献検索であると自負していただけに、このままではアイデンティティが失われると心から危機感を覚えた。この EBM というものを勉強して図書館員がどのように関われるのか、これまでの文献検索とはどう違うのか見極めなくては、と思った。幸い聖路加国際病院（当院）では、日野原重明理事長をはじめ、EBM に関心を持ち推進する風潮が高く、院内からも様々な教えることができた。本稿では、日本では唯一の医学図書館員向け教育プログラムであったリサーチライブラリアンワークショップの報告を中心に日本における EBM と図書館員のこれまでの教育状況を振り返る。更に図書館員向けの活躍の場として診療ガイドライン作成への協力、ハンドサーチのプロジェクト J-RCT の状況と日本医療機能評価機構で開始される医療情報サービス「MINDS」などについて報告し、今後のあり方について私見を述べる。

II. リサーチライブラリアンワークショップ

EBM をサポートする人材を養成する目的で、主に医学図書館員を対象とした教育プログラム「リサーチライブラリアンワークショップ」は、平成 10 年に厚生科学研究費特別研究として始まり、その後は 21 世紀型医療開拓推進研究事業、医療技術評価総合研究事業として平成 14 年度まで実施された。開催されたワークショップは、EBM の基礎やエビデンスの高い文献検索技術を学ぶことを目的とした「(EBM) リサーチライブラリアンワークショップ」(平成 14 年度は「EBM を支える情報の専門家のためのワークショップ」の名称)、情報の批判的吟味を学ぶ「CASP ワークショップ」、医学雑誌編集者を主な対象とした「EBM 時代の医学メディアのあり方ワークショップ」の 3 種類であった。ワークショップは東京を中心とした各地で計 10 回開催され、延べの総受講者数は 325 名に及ぶ(表 1)。津谷らは 1998 年から 2001 年にワークショップに参加した医学図書館員と非参加者である同僚の医学図書館員をコントロール群としたアンケート調査を行った¹⁾。その結果、参加者は非参加者に比べて、文献検索業務、他の研究活動、臨床支援活動、教育活動への関与が高く、ワークショップへの参加が医学図書館員の臨床支援活動能力の改善に一定の効果をもたらしていると考えられると報告している。この研究は平成 14 年度で終了となり、現在は医学図書館員のためのこうした教育プログラムは存在しない。筆者は第 1 回ワークショップの

KAWAI Fujimi

聖路加国際病院 医学図書館

fjmkw@luke.or.jp

表1 厚生科学研究費により開催されたワークショップ一覧

開催日	ワークショップ	開催地	受講者数
1999. 3. 23-25	リサーチライブラリアンワークショップ	東京	39
1999. 12. 26	CASPワークショップ	東京	30
2000. 2. 24-25	EBMリサーチライブラリアンワークショップ	東京	49
2000. 7. 22-23	CASPワークショップ	名古屋	24
2000. 9. 12-13	EBMリサーチライブラリアンワークショップ	大阪	31
2000. 11. 16-17	EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ	東京	18
2001. 11. 6	EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ	東京	32
2002. 1. 22-23	EBMリサーチライブラリアンワークショップ	福岡	20
2002. 12. 16-18	EBMを支える情報の専門家のためのワークショップ	埼玉	40
2003. 3. 3	EBM時代の医学メディアのあり方ワークショップ	東京	42

- ・平成10年度厚生科学特別科学研究事業リサーチライブラリアン養成についての調査研究
(主任研究者：中嶋宏)
- ・平成11-13年度厚生科学研究費補助金21世紀型医療開拓推進研究事業EBMを支えるリサーチライブラリアン養成についての調査研究(平成11-12年度主任研究者：中嶋宏、平成13年度主任研究者：緒方裕光)
- ・平成14年度厚生労働科学研究費補助金医療技術評価総合研究事業EBMを支える人材の系統的な養成に関する調査研究(主任研究者：緒方裕光)

受講者として参加し、CASP ワークショップを2回受講、その後は主催者側として関わった。そこで様々な学習の機会を得たのみならず、沢山の人脉を持つことができた。こうした系統的な教育プログラムが組織的に継続されることを切に望むものである。

Ⅲ. その他の教育プログラム

病院図書室研究会、近畿病院図書室協議会、日本病院会図書研究会、医学図書館協会などでもEBMの専門家を講師に招き、EBMを学ぶ機会を設けている。2001年には病院図書館員によるCASPワークショップがEBL研究会により開催された²⁾。また、医療関係者すべてを対象とするEBMワークショップが各地で開催されている。代表的なものとしてはEBMセミナー、Evidence Based Medicine & Nursingワークショップ、臨床EBM研究会公開セミナーなどがあげられる。こうした対外的なワークショップは日頃接触することのあまりない他院の医療関係者と一緒に学び、語り合うことができ、EBMの学習以外にも実りあるとてもよい機会となる。近くで開かれるそうしたワークショップにはぜひ臆せず参加していただきたい。

Ⅳ. 診療ガイドライン作成への協力活動

こうした学習の成果は、もちろん日常の図書館業務のなかで発揮されることが第一目的ではあるが、発展的な取り組みとしては診療ガイドライン作成への協力が挙げられる。具体的には、診療ガイドライン作成のための文献検索を図書館員が担当することが中心となる。これまでに図書館員が参加した事例としては、近畿病院図書室協議会による「慢性関節リウマチ」診療ガイドライン、東京慈恵会医科大学医学情報センター田部井氏による「糖尿病」診療ガイドライン、同大学阿部氏による「白内障」診療ガイドライン、自治医科大学図書館奈良岡氏らによる「胃潰瘍」診療ガイドライン作成班への協力などが挙げられる。

更に診療ガイドライン以外にも図書館員が活躍できる場として、以下の2つの取り組みがあるのでご紹介する。

Ⅴ. J-RCT プロジェクト

1998年度から開始された文部省科学研究費補助金・研究成果公開促進費による「日本のランダム化比較試験データベース」(Database of Japanese Randomized Controlled Trial:

J-RCT, 主任研究者：津谷喜一郎) プロジェクトは、日本で行われた RCT/CCT 論文の英文書誌情報を The Cochrane Library に収載し、日本発のエビデンスが広く世界的に共有化され、さらに日本語のデータベースを蓄積することによって日本語でもアクセスできる状況を作ることとを目的として実施されている³⁾。現在 27 誌のハンドサーチが進行しており、そのうち 6 誌は図書館員が行っている⁴⁾。このハンドサーチは、ある雑誌を決めて登録し、その後は自分のペースで進めていくことができる。詳しいマニュアルも作成されており、また疑問がある場合、判断に迷う場合はそれを事務局に問い合わせることができる。地方在住であっても十分参加可能なプロジェクトである。日本国内で発行されている雑誌の数から考えるとまだまだハンドサーチャーが必要なのは明らかである。興味のある方は是非筆者にお問い合わせいただきたい。

VI. 日本医療機能評価機構医療情報サービス

日本医療機能評価機構では、厚生労働省・保健医療技術普及支援検討会による「EBM データベースセンター」設置の提言を受け、2002 年度より厚生労働科学研究費の補助による医療情報サービスに着手した。今秋には厚生科学研究費で作成された診療ガイドラインと、それに関連する文献の構造化抄録をインターネット上で提供する計画を進めている。このサービスは医療技術評価総合研究医療情報サービス事業、通称 MINDS(Medical Information Network Distribution Services)という名称で予定されている。この事業の推進にあたり日本医療機能評価機構では、構造化抄録を作成する EBM レビューワーを募集している。英語文献が中心で疫学的知識も必要なため、内容的にはかなり難度が高い仕事であるが、機構とのやり取りはメールが中心で、これも地方にいても参加可能な仕事である。興味のある方は日本医療機能評価機構へお問い合わせいただきたい。

VII. EBM から EBL へ

これまでの日本における医学図書館員の EBM の教育状況、及び活動についてまとめた。今年度は厚生科学研究費の分配が EBM 関係の研究には厳しかったと聞く。これは EBM の学習を研究する時期はすぎ、すでにある程度の効果を上げたという意味でもあるのであろう。確かに EBM は学習するものではなくて、実践するものである。現在実践に結びつかない部分、足りない知識技能は自分達で研究していくべきであろう。また、我々は EBM を支えるだけでなく、EBM の手法を用い、図書館業務ひとつひとつのエビデンスを検証し Evidence-Based Librarianship を実践していくことも今後の大きな課題であると考え。

参考文献

- 1) 津谷喜一郎、金子義博：医学図書館員に対する EBM 関連教育の評価。平成 14 年度厚生科学研究費補助金(医療技術評価総合事業)分担研究報告書(主任研究者：緒方裕光) 2003.p.241-247.
 - 2) 河合富士美、木下久美子、熊谷智恵子他：第1回EBL研究会病院図書館員によるCASPワークショップの試み。EBM ジャーナル 2002 ; 3(3) : 406-409.
 - 3) 津谷喜一郎、廣瀬美智代、栗原千絵子他：日本のRCT論文をThe Cochrane Library / CENTRAL に収載するには。医学図書館 2000 ; 47(1) : 68-76.
 - 4) JHES (日本ハンドサーチ・エレクトロニックサーチ研究会)。日本発行雑誌でハンドサーチ(HS)が進行中のもののリスト (Ver.2.0, 2002.6.27) [引用 2003.8.24]. <http://jhesis.umin.ac.jp/>
- *ここに発表されているリストでは 26 誌であるがその後 1 誌(図書館員が担当)が加わったので本稿では 27 誌とした。